HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三浦 博「内村鑑三の生涯と思想」
Author(s)	ラフェイ, ミッシェル
Citation	基督教学, 34, 33-37
Issue Date	1999-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46609
Type	other
File Information	34_33-37.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

Hiroshi Miura,

The Life and Thought of Kanzo Uchimura

ミッシェル・ラフェイ

一九九六年に William B. Eerdmans Publishing Co. から Hiroshi Miura, The Life and Thought of Kanzo Uchimura, 1861-1930 が出版された。これは、著者である三浦博が、スコットランドのアバディーン大学に提出した論文を新たに編集し出版したものである。

本書は以下のような構成となっている――1. The Historical Background of Japan as a Setting for Uchimura's Life and Thoughts, 2. The Life of Kanzo Uchimura, 3. Why Does Japan Need Christianity?, 4. Japanese Christianity and Western Christianity, 5. Uchimura's View on Institutional Churches, 6. Uchimura's Mukyokai-shugi, 7. Japan: Its Mission to the World. さらに、巻末には Conclusions, Bibliography, Index が加われている。

外国人研究者として本書を読むと、彼の目的をよりよく理解することができるのではないであろうか。これまで内村について書かれた英語の文献は少なく、著者はとりあえず内村を英語圏に紹介するつもりでこの本を書いたのではないかと思われる。「結論」で著者は、本書の目的を次のように述べている――"Comparatively little information is available on Kanzo Uchimura in the English language; therefore this study may offer new information to some people. The present writer's intention in this study was to make clear the pattern of receptivity to Christianity in Japan, as documented by Kanzo Uchimura." ここにあげられた二つの目的のうち前者に関しては、著者は日本国外へ内村についての新しい情報を提供することに成功したと言えるが、後者

の日本におけるキリスト教の土着の問題については、いささか不十分であるように思われる。

まず、著者の第一の目的（new information）について言えば、彼は日本の歴史と内村の生涯を一般読者に分かりやすく説明している。これらの情報は、一般読者にとっては新しいものを含んでいるが、日本のキリスト教研究者や内村鑑三を研究する者にとっては、シンプルすぎてやや物足りない感があるであろう。評者が疑問に思うことは、なぜ著者が日本国外にまで行って内村鑑三研究をする必要があったのか、ということである。だがこれもまた、日本国外における内村についての資料不足の問題と結びついているのかもしれない。著者が本書を書いた動機としては、彼の師や友人から日本国外ではあまり知られていない日本人の紹介をすることの意義を説かれたということも考えられる。内村鑑三は、著者にとっては馴染みあるテーマでもあり、そういった意味で研究に利点があると考えていたのではないかと思われる。

土着の問題については何よりも文献が不十分である。使用された日本語文献自体が非常に少なく、五つの論文しか載せられていない。しかもこれらはすべて内村についてのもので、土着についての著作は一つも挙げられてない。これによる欠点が明らかになるのが、第四章のChristianity Grafted onto Bushidoである。著者は使っていないが、例えばここで武田清子の『土着と背教―伝統的エトスとプロテスタント』（一九六七年）を参照していたならば、内容もまた違ったものになっていたであろう。武田の土着の分析には四種類あり、その一つは「接ぎ木型」である。武田は例として内村のキリスト教の受容の問題を取りあげており、著者の論文にも参考に値するところがあったと思われる。著者は英国の大学という環境にあったために、日本語の資料を多く使用することができなかったのであろうか。彼の師や他の学生たちはあまり日本語ができなかったかもしれないが、彼が邦語文献を英語に訳して使ったならば、彼の研究ももっと英語圏に貢献するものになったと考えられる。英語の資料はいくつか使用されているが、土着問題をとりあげたものは主として二冊である。そのうち、カルダローラのものは社会学的視点からフィールドワークを行なり、無教

会運動と幕屋運動を通して土着問題を探究した著作である。もう一冊はヘンドリック・クレーマーの The Christian Message in a Non-Christian World であるが、この著作は一九三八年に出版されたもので、最近の土着問題に関する資料が含まれている可能性は低い。要するに、引用文献全体についての印象は、もっと日本の文献を使用していたならば、より論理のバランスがとれたのではないかということであり、日本人である著者にとって資料が入手困難であったということも考えにくい。

いわゆるキリスト教国に生まれた人間には、キリスト教が自国文化の背景としてある程度浸透しているため、キリスト教に対する違和感はなく、内村の悩みには理解しがたい部分があるのではないかと思われる。内村にとっては、独立したキリスト教が非常に重要な概念であり、彼は生涯をかけてそのようなキリスト教を探り出そうと努力している。基本的なレベルでこの困難と努力を詳しく説明したならば、少なくとも先に述べた点に関してキリスト教国読者の理解が得られるのではないであろうか。このような説明の試みは容易な作業ではないが、読者にとってはかなり価値のある議論であると考えられる。同様に、内村は外国のキリスト教に批判的であることは確かであるが、それは必ずしも外国批判と直結したものではないということも理解されてしかるべきであろう。内村の批判は嫌悪からではなく、愛から始まるものである。彼は愛するものに厳しい姿勢をとることが多く、批判することによってその欠点を治してゆこうとする傾向がある。もちろん場合によっては、その国におけるキリスト教を障害物とみなすこともあるが、それは全面的な否定ではなくアドバイスであるという側面をもっている。このような説明が読者になされたなら、内村の姿勢が一層明らかになったのではないかと思われる。

全体の流れは論理的で良いが、序論を書いていないため、著者の目的は「結論」にいたるまで不明確である。第一章を「序論」とし、自分の目的と動機を明らかに述べていたならば、その後の章の流れがよりはっきりしていたのではないであろうか。第一章は、一五〇〇年代からの土着を通じた日本キリスト教史の骨組みである。著者の目的からすれば、この程度で紹介としては十分なも

のたのかもしれない。しかし、一箇所だけ違和感を覚えたところがあった。著者は、徳川幕府による三〇〇年間の鎖国が日本のアイデンティティの発達を助け、中国とは異なって日本では、現代にいたるまで自国の文化を他の文化によって薄められることがなかったと主張するが、例えば仏教や儒教や漢字等のことを考えてみるならば、異文化の影響がないということはできないであろう。さらに個人的な見解を述べるならば、そのことによって日本の文化は薄められたというよりもむしろ豊かになったのでないかと考える。第二章は内村の生涯の紹介である。この紹介は、全く内村を知らずに読んでも、内村のことを大筋で把握できるものであるが、内村の生涯におけるその思想の変化を問うところが少ない。特に後の教会の議論においては、彼の青年時代と晩年の考え方に変化が見られるので、そこを検討すれば論述はより充実したものになったであう。

第三章から第七章までは、それぞれのタイトルにしたがって、内村の考え方を説明する。ただ先にも述べたように、著者は最初に問題と方法を述べていないので、彼がポイントとする点が明らかでない。多くの章は内村の教会観とキリスト教観を問うものであり、そこから、日本にどのような形でキリスト教を取り入れるのがふさわしいかという議論になっている。例えば第三章の "Why Does Japan Need Christianity?" では、著者は内村の言葉を以て社会問題等とキリスト教とのあるべき関係を問うが、著者の解釈や意見は言明されていない。この傾向は「結論」にいたるまで見られ、結論部において初めて著者の意図と意見が明らかになる。第七章では、著者は世界に対する日本の天職というものを検討する。ここにおいて、日本がキリスト教を清めると期待していた内村の姿勢が指摘される。だがさらに、内村の期待が現代日本のキリスト教に実現されているかどうかが議論されていたならば、現代の読者にも将来の読者にも興味を惹くものになったであろう。第三章から「結論」まで内村の引用が多く、内村の思想や言説を普段見聞する機会のない読者に英文の資料を与えたことには意義が認められる。内村の言葉直接読み、自分自身で考えることは、確かに読者のためになる。

最後に、言語の問題について一言つけ加えておきたい。評者も外国語で研究し執筆しているので、著者が英語でこの著作を書き上げたことに関しては賞賛するのみであり、外国語で読み書きする苦労と努力はよく分かる。このような研究や執筆は、周囲の助力なくしてはできるものではない。本書も著者と著者の proofreader の尽力によって完成されたものであろう。

追記　なお、本書に対しては、すでに渋谷浩志の書評が出されており、評者も参考にさせていただいた（『内村鑑三研究』第三十三号、一九九八年十二月）。